

公開研究会 活動事例報告

高山エネルギー大作戦この10年

NPO 法人活エネルギーアカデミー

理事長山崎昌彦

森林面積 92%を占め、自然エネルギー活用日本一をめざす高山市の「高山エネルギー大作戦」が10年を迎え、当法人の活動を環境、経済、コミュニティの観点から振り返ると次世代への“つなぎ”方が浮かび上がってきます。

その具体事例「木の駅プロジェクト」「地域通貨」「子ども大学たかやま」を紹介しながら、“小さな林業”の実践がやがて新産業として開花し、市民参加の活動として展開する夢を語り合いたいと思っています。

先祖から受け継ぐ財産としての、さらには子孫から借り受け預かった大切な地球（自然）の中に暮らすということ・・・我々現役世代がやれることやらなければならぬこと、自助、公助、共助の覚醒です。

私は30歳から58歳まで種々の製造業(産業)の業績回復、利益向上をコンサルティング業という立場でトヨタ生産方式(TPS)

1. 人偏のつく自動化 2. ものの停滞を省くジャストインタイム(JIT)の思想 で現場に潜む“ムダをトル”改善手法の実践研究をしてまいりました。

それらの経験を踏まえ、地域社会の可能性を信じ今日まで、あらためて林業を生活環境の場にする活動をいたしております。

今回のオファーを契機と感じ、故ミハヤエルエンデ氏が私たちに残した遺言、永続的な社会生活のツール“地域通貨”を目指し

ている実践事例を報告致します。

1. 高山エネルギー大作戦この10年
私が関わってきた産業界は大きな(大量)コトを良し、として機械化、装置化して、人が少ない現場へと進んでいます。当法人は無人工化ではなく、有人化(人が集まる)が産業であり、生活です。

2. 間伐材の利活用のための定期物流システムと地域通貨 enepo の発行運営による循環型経済モデル

3. 薪割り

子ども大学と題し、夏と冬イベントが定着

4. 炭焼き

5. 水車発電 自転車のダイナモを利用して下掛け水車を作成

再生エネルギーがブームですが、当法人は、これ以上必要か、生活のあり方を考えて、少ないエネルギーで充分だとする考え方です。

6. 自家発電ストーブ MoMo

薪を完全燃焼させる“ロケットストーブ”(100年前からの技術)と熱を電気に変換する外燃機関“スターリングエンジン”(200年前の技術)を複合した発電に世界初の成功。

7. 生活改善プロジェクト

ゴミステーション袋数

我が地域のゴミ量実態を表示することで減量に成功

8. プラゴミ対策事業13カ所まちづくり協議会にて実施

9. みどり豊かに見えるが ..。実は

10. 森のなかは真っ暗で 外向きしか枝がない

11. WOOD JOB

安全講習 木の駅プロジェクトの様子

12. 間伐 幹・枝・葉っぱ (いくまい水)

13. いくまい水

杉の葉っぱの超高压圧縮蒸留により土壌改良剤となる

14. 飛騨の米がブランドに

いくまい水の成果

15. 次世代につなぐ木の駅プロジェクト

20歳代から86歳まで親子3世代

(約120名が登録)

毎週やるのが活動だと定義し、一年間通しての活動が健康体のリズムをつくり 森林に育まれる地域生活を実現します。安直で便利な暮らしが幸せか？ 大変な事、面倒なコトを皆でやりキルから仕事だ！

16. 積みマイカーシステム

みんなで材木を積みましようと呼びかけ命名、高山市のトラックが巡回集材

17. エネポ材を建築用材に活用

18. 木の駅物流の付加価値 UP 挑戦

19. 山の自然に行政と金融機関が市民と関わる相関図

20. 小さい林業の自然循環

21. 地域通貨の経済循環

22. 地域通貨協賛店

23. 地域通貨国際会議

2019年9月、アナログ(enepo)とデジタル(さるぼぼコイン)を実践する高山市でアジア初開催

どんな仕事の付加価値が通貨になるかが出発点

24. エネポの地域通貨運用の考え方

お金でお金を生むのはオカシイ！が原点、対価交換であって、手数料無しがルール

25. 市民が里山に向うアクションプラン

26. 受賞歴

27. 地元の団体との協働

NPO 法人飛騨高山わらべうたの会 岩塚久案子さん。そして高山市まち協防災士女子会 山本真紀さんには本日のZOOMにもご参加いただいていますので、質疑の際にご活動についてお話をいただければと思います。

28. QR Code

〔緒言〕

増幅する経済から限量経済へ！

～限りある時間、限りある資源は自然の摂理により循環する～

先進国の少子化現象は嘆きばかりでは無い、一人あたりの自然享受が増えるという明るい未来を約束しています。

私たちはどう捉えるかが勝負です

足し算かけ算一辺倒から割り算引き算で捉える日々の暮らし方が幸福への道と心得たいものです。

小さい単位で地産地消、経済循環、“方言”コミュニティの知恵を生かして、そうして次世代へと“つなぎ”たいと願っています。

文責 山崎昌彦

